

佐多稲子
重き流れに



講談社

重き流れに

昭和四十五年三月十六日 第一刷発行
昭和四十六年七月十六日 第五刷発行

著者 佐多稲子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号 一一二

電話 東京 (九四二) 一一二一 (大代表)

振替 東京 三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社 国宝社

定価 六五〇円 落丁本、乱丁本はおとりかえします。

© 佐多稲子 昭和四十五年 Printed in Japan

目次

氷
結

日の翳り

紅
葉

一筋の黒い糸

赤い夕陽

転
機

空蒼く

移りゆき

若みどり

旅
路

華
燭

早
春

180 163 147 138 117 101 85 70 54 38 23 7

秋 景	豪雨を行く	流 動	夕 映え	雲の行方	火 照り	風に舞う楡の実	粗い足音	絆	黄 塵	心の城	家の中
--------	-------	--------	---------	------	---------	---------	------	---	--------	-----	-----

367	351	335	319	304	289	274	258	242	227	212	196
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

装
幀
荻
太
郎

重き流れに

早春

青山六丁目のそのひとつの小路は、大きい邸もないけれど、同じような板塀のつづく静かに落つた通りであつた。朝のひとつき、通学の子供たちの軽いざわめきのあと、出勤の靴音にまじつて、官員らしい人に乗せた人力車が一台通る。そういうことの過ぎたあとは殆どひっそりして、縁の外に小鳥の声が聞かれた。

岡野の家がこの小路に移つてきてから、ようやく一年と半ばになる。この家では中学生の男の子と、あと二人の女の子たちが学校へ出てしまうと、母の滋子と長女の尚子ひさこが残り、家の中もひっそりした。今朝もそういうとき、尚子は茶の間につづいた小部屋で、髪を結っていた。尚子の色白く、華奢な身体つきと、梳とかしている黒髪の艶やかに豊かなのは、母に似ていた。が、寛やかに丸みのある額や、象牙づくりのような鼻筋、花の蕾のような口元などの、柔かな輪郭の中にととのっているのは母にまさつて美しく秀でて見えた。そうつと、しかしいつも何か問いかけているようなまなざしに、若さがみずみずしい。尚子ひさこはこの春十六歳になつてい

茶の間で柱時計が十時を打つ。滋子はそれを見上げて、思いのかげろ視線になり、それから尚子^{ひさこ}に呼びかけた。

「尚さん、お前、これから山栗まで行っておくれでないか」

「はい」

と尚子は答えて、自分の答えた表情を鏡の中に見つめた。滋子はためらうように言い直す。

「母さんが行ってもいいのだけど」

「いいえ、母さん、わたくし、行ってまいります。久しぶりに日本橋へ行くのは嬉しいわ」

尚子はあとの言葉を云うと、もう自分でも日本橋へ久しぶりに行くことに弾んだ表情になっていた。山栗は〈栗〉という商標で知られた証券会社である。それは兜町にあった。兜町とおもうだけでなつかしい。日本橋は尚子の生れて育った場所だった。明治四十一年の市区改正で、その住みなれた家を立ちのかねばならなかったとき、お上の御命令ならば、とこの青山へ移ってきたものの、日本橋室町三丁目は尚子の胸に宝物のように抱かれている。江戸の中心に生を得たということは、ひとのおのの故郷への思いに増して、尚子の心の輝く支えになっているようであった。今日、山栗へ行く使いが何であるか、聞くまでもなく尚子は知っている。この使いも尚子は初めてではない。今日も母の手元は不如意になったのであろう。こういうときこの家では公債を手離すということしか、ほかに方法を知らないものであった。

尚子は軽く前髪をふくらませたひさし髪に結い上げると外出の着更えをした。滋子は簞笥の小抽出しから、尚子に持たせる公債を取り出しながら、臉にかげりを見せている。が、滋子に

は、公債を割引くということが、みすみす損失になる、ということさえ果して実感されているのか、それよりも彼女は、尚子にこの使いをさせることの方に気を重くしている。元、前橋松平藩中五百石の、士族の出である滋子は、明治に生れながら、生家の氣風を濃く残して、金銭にうとかった。尚子の方が母のその弱さを知っていた。まだ尚子が十歳ぐらいのときだったが、長岡の縮屋が反物の代金を取りに来たときのことを尚子は今でも覚えていいる。お下げ渡しを願います、と頭を下げる縮屋に、滋子は袋ごと差出して、どうぞその中から持っておいで、と言ったのだった。それでいて、借着より洗いで、鷹は飢えても穂を食まず、などと云う母であつた。がこの母のしつけは、日本橋室町三丁目のいわゆる下町のある厳しきにもどこか合致するものであつた。日本橋室町のきびきびと華やいだ雰囲氣の中には、定めの固い氣風が存在して、士族出の滋子のしつけとそう別のものでもなかつたのである。尚子はそのようにして育つてきた。

父の岡野司郎は、室町に二十五代つづく商家の出でありながら、自身は逋信省の電信技師であつた。明治の新風を鋭敏に受けとめた岡野青年は、森有礼の下に身を寄せ、帝国大学創立のとき、ここに学んだのである。以後、彼は日本の新たな無線電信の仕事に心血をそそいだ。自らの研究と後進の教育、指導にも当り、台風のとには沖繩から千島まで被害調査に出かけもした。岡野司郎にとってこの情熱は、開けゆく日本の国威に参与するものだったのである。司郎がその千島へ出張したときである。上野へ帰着する時間の知らせが電報できて、尚子は母の云いつけで弟の庸介を連れて上野駅へ父をむかえに出た。むじなの襟巻をした父はのび放題の

髯づらで汽車を降り立ったが、尚子と庸介を見ると、おう、と肩を叩いたまま、

「お前たちは先きへ帰れ、父さんはこれから宮城へ行つて御報告申上げ、それから学校へまわる」

と、すたすたと去つて行つた。岡野司郎は二重橋前で手をついて、岡野司郎、ただ今帰りました、と報告する、そういう男であつた。夏の初めには、宮城前の松の木の毛虫を取れ、と尚子や庸介に云いつけもした。室町から宮城前まで遠くはない。尚子たちは、割箸と、空かんに石油を入れて持つて行き、宮城前の松の木の毛虫を取つたことが何度かある。

この父が急性肺炎で亡くなつたのは尚子の十三歳のときであつた。この青山へ移つてから三回忌をむかえた。この家の万事が音をひそめたような静かさにあり、滋子の品のいい顔に憂いのかげのあるのは、この悲しみに重なる頼りなさを見せているものであつた。尚子は寄り添うようにして母を支えているが、まだ肩上げを残した娘である。今日、山栗へ売りにゆく公債は、岡野司郎の無線電信の仕事につくした功勞が伝わつて、四人の遺児の育英資金にと、広く集まつたものだった。しかし恩給暮らしは、豊かであるはずはなかつたから、尚子は青山へ移ると同時に、お茶の水付属への通学をやめた。先ずひとりきりの男である庸介の学費を確保しておかねば、という覚悟であつた。

仕度を終えた尚子は、緋の銘仙をきて花模様のある紫縮緬の帯を小さくお太鼓に締めていた。滋子はその帯の結びを直してやりながら、気づかう調子になつて云う。

「用がすんだら、まっすぐ帰つておいでなさい。室町のあたりを歩いて、知つた人に顔を見ら

れるのは、みっともないものではありませんよ」

「大丈夫ですよ母さん。知った人に逢ったって別にかまやしませんでしょう。ちょっと歩いてみたいじゃありませんか。なつかしいんですもの」

「娘がひとりであらう歩きなどするものではありません。母さん心配して、待っていますからね」

「はい」

殊更に首をかしげて見せて頬笑んだ。長女だから、尚子はいつとなしに母親に対していたわる接し方をしている。

「行ってまいります」

畳おもての履物に紫びろうどの緒がすがって、足袋の白さがきわ立つ。小さく形のいい足先きであつた。

青山から来ると日本橋界限は、別世界の活気に感じられた。市区改正で広くなった表通りでは、あつちでもこつちでも建築中だし、人力車はひっきりなしに走っていた。筒袖、縞木綿の着物に前かけ姿の小僧が忙しそうに歩いてゆくのも尚子はなつかしい。彼女は山栗で三枚の公債を金に換えた。一枚百円の公債は六十五円に割引かれたが、とにかく大金だからしっかりと風呂敷を結んで抱えていた。証券会社での対応の気持がまだ残って、尚子はちょっと気負った

表情になっている。父が亡くなって、現在はわが家のいちばん不幸なとき、という気持がある。しかも明日どう転換できるという事情でもない。それをはっきり知った上で、自分の中の何かを湿りけなく保っているような尚子の張りは、今歩いている町の気質かもしれない。

日本橋も改築の最中であつた。尚子たちが室町を引上げる頃に始まつた工事がまだ続いている。尚子の知っている日本橋は木の橋だつた。まもなく日本橋はコンクリートと鉄の洋風の橋に出来変わるのである。すでに川の上に、二つのアーチ型に組んだ石の橋桁が見えていた。日英同盟というのができ、日露戦争がとにかく勝利で終つて、日本は世界の五大国のひとつになつたから、東京の町もどんどん変わるのだ、と尚子はおもう。日英同盟が結ばれたとき尚子は小学の三年生であつた。コンノート殿下という英吉利の貴公子が日本訪問をしたとき、越後屋が三越百貨店になつて、その三越百貨店の門の上に、両国旗を組み合せて掲揚してあつた。歓迎、アーサー・オブ・コンノートと片仮名で書いてあるのを、尚子は何度も口の中でくり返して覚えてたものだ。

その三越百貨店はすっかり大きな洋館に建ち変つてゐる。尚子はそれを今日初めて見るわけではないが、内部がすっかり見える広いガラス張りは、やはり新しい感覚で眺められるものであつた。三越の次の建物が三井の集会所、その五、六軒先きにラシャ問屋がある。尚子はちょっと歩調をゆるめてこの店の前を通つた。もうこの店を目の前にしては、以前のわが家を思い描きようもない。このラシャ屋の店が元の自分たちの家の跡だとわかつていても、かつての、表通りから一歩引込んだ位置にあつたし、またやの、どっしりした中に玄関など氣どつて粹風で

もあつた家は、尚子の記憶の中に残るだけであつた。用心籠といって、畳一枚ほどの大きさの竹籠を三段に重ねて、天井すれすれに吊つてあつたのなども目に浮んでくる。すわ火事、といふときの用意の籠だつた。あんな籠、どうしたのかしら、と尚子はおもうが、そんなものも無くなつてしまつたにせよ、母を責められはしない。おもいがけない父の死のあと、一年後には住みなれた家を離れねばならなかつた母としては、古い家財などどうでもよかつたらう。父の棺をおくり出した日のことがまざまざとおもひ出されると、尚子はまだ足早になつた。

滋子が日本橋へ来たがらないのもわかるようにおもわれる。尚子も室町の通りを歩きながら何となくそわそわとなるものがあった。幸い誰に顔を見られるということもなかつたが、自分の感情の中に何かあらがうものがある。自分がここで生れたという誇らしいものとともに、尚子はこの町が心から好きだつた。テケテン、テケテンと軽く弾む祭りばやしの音も尚子の感覚に染みついている。用心籠が備えてあるほど下町は火事早く、ひとつ半^{はん}からすり半^{はん}まで火の見の半鐘が聞えてくるとそれを耳で数えて、三つ半^{はん}なら氣負い立ち、一つ半^{はん}なら、ああ遠い、とむしろつまらなかつた。こういう氣質を尚子は自分でも承知している。祭りが好き、火事が好き。そういうときのこの町の、きびきびと華やぐのが子供の心に好もしく染みついたのにちがいない。尚子が今歩いているこの道は先頃までゴム毬をついて遊んだところだ。向いの浮世小路の福德稲荷の縁日では粹な手拭かぶりのおばさんが鉄板焼で小さな籠をつくってくれたし、五月と九月には、ここの神主が岡野の家にもおはらいに來た。尚子は今そこを歩いている。が今はもう、そこからどこへ一步入り込んでゆくところはなかつた。尚子の家を買ひとつた羅

紗間屋を、彼女は知りはない。ここで育った自分というものを抱いて帰るしかないが、何だか不安な気がしてくる。尚子はもの悲しい感じにもなり、しかしその気持をねじ伏せるようにして歩き、本町の角から常盤橋御門の方へ曲がった。春はまだ浅くときおり冷たい風が吹いていた。

そんな気持で尚子がわが家に帰りつくと、滋子が玄関に走り出てきて、妙にまじまじと見た。おや、と尚子は母の表情のちがっているのに気づいたが、そんなにおそかったかしら、と、おもいながら詫びて云った。

「どうもおそくなりました」

「ああよかった」

滋子はほうっと、肩を落とすように云う。

「何だか心配で心配で」

「何をそんなに心配してらっしゃるの。大丈夫ですよ。母さん。わたくし、もう子どもではありませんもの」

「だから心配なのですよ」

滋子は尚子の渡す風呂敷包を無意識のように受けとって、尚子を先きに立てて茶の間へ入った。

「もう、お前をお使いになど出せない」

とまた云って、再び尚子を改めて見るようなまなざしになった。